

◆九月十六日

日高山入相花王

渡し場の段

朱雀天皇は、弟の桜木親王に皇位を譲ろうとするが、藤原忠文や純友に妨げられた。命を狙われた桜木親王は僧安珍に身をやつして旅をするうち、熊野真那古庄司の館で恋人に再会し、道成寺へと向かう。ところが庄司の娘清姫が、親王とも知らず安珍に恋をしたのである。嫉妬に狂った清姫は安珍の後を追う。

渡し場の段

月明かりの中、道成寺に程近い日高川へとたどりついた清姫は、渡し守を呼んだ。しかし渡し守は、安珍に金をもらって十六、七の娘は川を渡さないようにと頼まれていた。清姫が安珍への思いを語るうち、雨が激しくなり、川の流れも急になる。そして清姫は、嫉妬の念でその身を大蛇に変え、日高川を渡っていくのである。

艷容女舞衣

酒屋の段

茜屋半兵衛は上塩町（大阪市天王寺区）で酒屋を開いています。その息子の半七は、結婚した後も以前からつきあいのあった女芸人三勝との関係が続け、娘までつくり妻のお園には見向きもしませんでした。

あまりのことに腹を立てたお園の父宗岸はむりやりお園を実家へ連れ戻し、半七は勘当されました。

その翌年の正月、半兵衛は代官所に呼び出されました。その留守中に、酒を買いにきた女性客が、求めた贈答用の樽酒と幼い子供を残して消えてしまいました。どうやら半兵衛を頼っての捨て子のようなのです。

宗岸がお園を連れて半兵衛を訪ねてきます。なんとかお園を元どりの嫁と認めてもらおうと詫びに来たのです。実家へ戻っても半七との別れを悲しみ続ける

娘の姿に、宗岸は心を痛めていたのです。

しかし、半兵衛は半七が一昨日人を殺していることを知っていたため、復縁してはお園に迷惑がかわかると思い断ります。

半兵衛は代官所へ行き半七の代わりに縄を受けて来ていました。勘当した子でも、人殺しの罪を犯した半七の命を少しでも延ばしたい一心からでした。二人の父親の愛情に、皆は涙をこぼします。

皆が一問で語り合っている間に一人残されたお園は「今頃半七さんはどこにどうしてござろうぞ……」とかえらぬ夫を慕うのであった。

壺坂観音霊驗記

沢市山の段

●これまでのお話

大和の壺坂寺のほとり土佐町に住む座頭の沢市は、琴や三味線の稽古をしながら美しい妻のお里が、まめまめしく洗濯や賃仕事をしてくれるのを頼りに、細々と暮らしています。

沢市は夫婦になって三年、お里が明け方になると寝床を抜け出していくのに対し、「自分が盲目ゆえに外に男でも」と疑いを持ちます。夫の疑いを知ったお里は驚きます。そこでほうそうから盲目となった夫のために壺坂寺の観音様に祈願を続けてきた真心を打ち明けました。

●この段のお話

沢市は不自由なひがみから、貞節な妻を疑ったことを詫び、お里の奨めに従い壺坂寺にお参りすることになりました。

壺坂寺はその昔、桓武天皇の眼病が、時の住職の祈禱によって平癒したという西国六番の札所です。沢市は本堂に着き、夜もすがら御詠歌をあげ、三日間ここに籠もり断食すると決心します。しかし、お里が帰った後沢市は、どうせ望みは叶うまい、死ぬのが妻への返礼と、谷に身をおどらせました。

山に戻ったお里は、夫の姿が見えないので狂乱した

ように駆け回り探したあげく、谷底に夫の死体を見つめます。そして、形見の杖を抱きしめて、沢市の後を追う自分も谷底へ飛び込みます。

谷底に並んで伏した夫婦の前に観音様が現れ、お里の貞節と日頃の信仰心によって寿命を延ばすとのお告げがあり、二人は生き返ったばかりか、沢市の目も見えるようになりました。喜び勇んだ夫婦は、万歳を舞ってお礼参りをするのでした。

人形遣い手

中学生

人形芝居保存会

浅井多美代	浅井 優太	会長 浅井 弘之
石本 鈴代	尾崎 桃花	副会長 石井太佳夫
大野 楓	片山 光平	副会長 中村 育子
尾崎 壽美	岸本 玲奈	会計 仲野 一正
城山みのり	坂下 龍大	理事 浅井 洋幸
谷岡 茂良	橋井 歩	理事 石本 直樹
出口みさと	池田 晶	理事 河村千代美
中井 勝利	浦羽 健太	理事 中川 祐一
中北 純子	尾崎 玲那	理事 浜口 祐子
中原 智美	片山 佳音	理事 浜口 信広
中村 育子	出口 結葉	理事 松井 幸男
南部真奈美	南部 一花	理事 浜田 浩
西村 勝和	迫間ひより	監事 浜口 保寿
浜口 文子	橋爪こころ	監事 村瀬 幸司
浜口 祐子	三橋 一也	
浜口 幸夫	向井 日菜	顧問 竹内 千尋
前田 佳兵	山本 来夢	
溝口早代美	浅井 晴	
箕浦 暁美	片山 愛心	
村瀬 好美	濱口 朋香	
本岡美保子		
森下 奈菜		
森本 拓路		
尾崎 真吾		
浜口久太郎		